



## スラムダンク

私は、集団が活性化する中で相乗効果が生まれ、個人の力量を高めることができたらいいと思っています。「集団が個を育て、個の成長で集団が育つ」とよく生徒に話していました。ついでに集団主義と集団教育の違いについても併せて話していました。「集団主義とは違いよりも同じ面を強調して、個々のメンバーの基準に合わせるだけ。集団教育とは個を育成するために集団体験を活用すること」だと。

また、似たような話で同調と協調の違いについても話していました。「同調とは自分を殺して他人と合わせる。協調とは違いを認め合い、個人が独立している中で、お互い折り合いをつけること」だと。

さて、聞いた話ですが「スラムダンク」などの作品で知られる漫画家の井上雄彦さんによると、魅力的なキャラクターをつくるコツは、「それぞれに必ず弱点をもたせる」ことだそうです。確かに完全無欠のスーパーマンが登場してしまうとリアル感が失われます。そして「さまざまな個性のキャラクターが交わるからドラマに深みが出る」と聞きました。

みなさんのクラスや部にもいろんな人がいて、おもしろいドラマが毎日生まれていると思います。スーパーマンのような人は現実どこにもいません。だからこそチームをつくる価値があるといえます。お互いの弱点を補い合うことでスーパーチームに近づいていくことはできます。そしてスーパーチームは楽しいのです。

例えば、プレゼンで話すのは得意だが資料の整理は苦手とか、体力はあるがケアレスミスが多いとか、知識は豊富だがすぐに人と衝突するとか、それらの逆とか、例えればきりがなくらい人には一長一短があります。しかし、それがわかればチームづくりはできます。

私は以前、朝の礼拝の際の「校長講話」の中で、1年間の見通しを話しました。1学期は「お互いのことを知ろう」。そして、2学期は「誰とでも組める力」をテーマにするといいと言いました。わかり合って、組み合わせさせてチームとして個性が生まれます。そうすると、一定レベル以上の実践力は確保できます。つまり、メンバーが有機的に結びついているということなのです。同質な人間が複数集まってチームを結成してもこうはなりません。フォローする部分が少ないと、生きた組織体になりにくいのです。でも個々人の長所、短所がパズルのように都合よく組み合う保障はありません。

以前指導していたサッカーチームは、まさにはっきりと弱点をもっている者の集まりでした。そのメンバーを組み合わせると徐々にパズルのようにはまっていく感じになりました。そして、苦手を得意に変える選手も出てきました。すると「やりたくない」とか「できない」と言い続ける選手はいなくなりました。それは、きちんと自分の弱みをさらけ出して、お互いそれをフォローし合う中で変わっていったと思います。要は、**そういう気持ちや考えを不安なく言える居場所であったことが、一人一人の成長力を高めていったのだと思います。**そのチームは市内70校中2位になり、部員たった11人で県大会までいきました。

みなさんも同じだと思います。自分の考えをもったり、伝えたりできるためには、3つの要因が必要と言われます。自分の考えをもつ練習をする「認知的要因」。自分の考えをつくる機会を与える「習慣的要因」。そして一番重要なことは、自分の考えをもつことが不安ではないという「感情的要因」です。練習や場づくりは先生たちができます。しかし、この「感情的要因」をつくることは、みなさんの人間関係づくりにおいて、しっかり相手を大切に作るマインドが育っていないとうまくいきません。

みんなでスーパーチームに近づけるようこれからも仲良くしてほしいと思っています。

(学校長 重枝 一郎)

